

SciREX

～政策と科学を考える～

2024



on
ar
+
e
r
y

サマーキャンプ：
初対面とは思えない活気。
多様なバックグラウンドを持つメンバーが
融合した1日目

サマーキャンプ：
中間交流会で新たな刺激やヒントを
得ることができた2日目

サマーキャンプ：
つなぐ力、越境する力を發揮し
やり切った最終日

26

SciREX
サイレックス事業

政策提案プロセスを体験。

参加者たちが議論を深め合った3日間

初対面とは思えない活気。多様なバックグラウンドを持つメンバーが融合した1日目

2024年9月13日～15日の3日間、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業（SciREX事業）の一環として、SciREX サマー キャンプが東京・六本木の政策研究大学院大学（GRIPS）で開催されました。

13回目となる今年は、SciREX事業の人材育成拠点がある6大学（GRIPS、東京大学、一橋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）および名古屋大学から、約50人の学生が参加。多様なバックグラウンドをもつ参加者たちが知見を出し合って議論を進め、具体的な社会課題を想定した政策提案プロセスを体験する貴重な機会となりました。充実した3日間の様子をレポートします。

参加者が一堂に会したオリエンテーション

2012年から毎年開催されている『SciREX サマー キャンプ』。SciREX事業の人材育成拠点がある全国6つの大学から、年に一度学生が集まる貴重な機会です。コロナ禍においてもオンライン開催で志をつなぎ、今年は対面形式に戻って3回目の開催となりました。

快晴に恵まれ初秋とはいえ汗ばむような陽気となった初日は、オリエンテーションとグループワークが行われました。正午を過ぎると全国から集まった参加者が次々に受付を済ませ会場へ。webで事前学習を行っていたこともあり、グルー

プのメンバー同士、初日から打ち解けた印象がありました。

オリエンテーションではまず初めに主催者挨拶として、文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課、根津純也 政策科学推進室長が登壇。

「このサマー キャンプは政策のための科学を広げていく非常に重要な取り組みです。最終日の政策発表に至るまでの過程で、普段会うことのできない多様な人たちと出会い、議論することを通して少しでも多くのことを吸収し、またネットワークを広げ今後の活動に活かしていただきたいと思っています」と挨拶しました。



主催者挨拶を行った根津純也政策科学推進室長



続いて、GRIPS 教授・副学長で、SciREX センター長の黒澤昌子氏が「国際秩序や地球環境の変化、そして科学技術の著しい発展に伴って政策が対象とする分野は非常に広く、また複雑化してきています。特に地球環境や人口減少の問題などの社会課題においては、企業も課題解決を担う役割を果たすようになりました。今後、社会課題を解決する産官学の共同プロジェクトをますます進めていく必要があります」と述べました。

また黒澤氏は今年のサマーキャンプのテーマ「How do we live towards a creative future?」にも触れ、このような時代において未来を切り開いていくために必要なアントレプレナー的思考を身につけてほしい、と参加者に語りかけました。



SciREX センター長の黒澤昌子氏

今年のテーマ「科学技術イノベーション×政策×アントレプレナーシップ」とは

続いて、その言葉を受けるように実行委員のリーダー役の一人、吉村拓也氏が今年の開催主旨について改めて説明します。

「SciREX の中核的なテーマである科学技術イノベーションや政策といった要素に加えて、今年度はアントレプレナーシップを加えることで、これからどう生きるか判断が難しい時代に創造的に人生を切り開き、政策立案をしていただくことを目的としてこのテーマを設定いたしました」。

日本語で起業家精神と訳される「アントレプレナーシップ」は、一見ビジネス用語のようでいて、これからの時代を生きる皆にとって必要な考え方であることです。なぜなら技術進歩の速い時代において人生もいわば起業の連続であると



開催主旨を説明する実行委員の吉村拓也氏

言えること。このサマーキャンプを通して、変化の激しい時代に必要な考え方を養ってほしい、という言葉に参加者は興味深く聞き入っていました。

アイスブレイクで参加者が自己紹介

三氏の挨拶に続いて、今年の試みとしてアイスブレイクが実施されました。参加者全員がマイクをつなぎ、一人 30 秒の持ち時間で自己紹介を行います。所属大学や企業、普段の研究内容に加え、グループワークで何と呼んでほしいかというニックネームを自ら発表。一人が話し終えるたびに会場からは温かい拍手が送られていました。



初日に開催されたオリエンテーション

今回参加した約 50 名のメンバーの顔ぶれは、10 代の学部生から、修士課程の 20 代、企業や官庁に籍を置きながら大

初対面とは思えない活気。 多様なバックグラウンドを持つメンバーが融合した1日目

学院で学ぶ30-40代の層、さらにはメーカー勤続数十年というベテラン勢まで、所属も年齢も本当にさまざま。オリエンテーション終了後に早速行われるグループワークに向けて、互いを知り緊張をほぐすことができたようです。

オリエンテーションとアイスブレイクを終えた参加者からは「このようなイベントに参加するのは初めてで不安もありましたが、少し気が楽になりました」、「普段会えないような多彩なバックボーンを持つ方々が参加していることが分かったので、ぜひ交流の輪を広げたいです」、「3日間で議論を尽くしてグループの皆としっかり政策提言をまとめたいです」などの声があがっていました。

オリエンテーションに続いてグループワーク開始

オリエンテーションに続いて午後2時からは早速グループワークがスタートしました。日本語グループ9、英語グループ3、計12のグループが4教室に分かれ議論を進めます。



12グループに分かれて行われたグループワーク

深刻な地球温暖化、各国の社会における分断の先鋭化など世界が多くの問題に直面する中、日本においても気象災害や迫り来る人口減少など様々な課題を抱えています。今年のサマーキャンプでは、これまで様々なイノベーションを起こしてきた科学技術の成果を享受し、サイエンスの手法を多様性をも考慮して政策に落とし込むべく、以下の9つのテーマが設定されました。

- 『イノベーションエコシステム（社会実装・産学連携）を推進する人材育成』（日本語、英語話者による2チーム）
- 『アントレプレナーシップとSTEAM教育』（日本語、英語話者による2チーム）
- 『課題解決に向けたスマートシティの社会実装』（2チーム）
- 『エネルギー政策の国際比較と次世代エネルギー』
- 『研究開発・社会実装を強化する大型プロジェクトの立案』
- 『障がい者・高齢者の社会的包摂』
- 『生成AIとクリエイターの共存』
- 『地政学リスクに対応するためのサプライチェーンの多元化』

設定されたテーマに対し、希望等により数名でグループを構成。普段所属している大学や企業での研究に関連したテーマを選んだ人もいれば、初めて取り組む課題に挑む人もいて、各グループともまさに多様性のある顔ぶれで構成されています。グループワーク開始後は、3日間という限られた時間内で政策提言をまとめるために、盛り込みたいテーマや切り口を探す作業が早速進められていきました。

初日から議論白熱、エピソードが披露される場面も

今回のグループワークで活用されていたのが、大判のチャート表です。「メンバーの問題関心」「現在の課題」「議論の流れ」「ほしい情報」といった欄に、手書きのメモを貼り付け可視化できるようになっています。初日の今日はこのチャート表を用いたアイデア出しのほか、事前学習で課題となっていたことを発表し合ったり、ZOOMで識者にヒアリングを行ったり、さまざまなカタチで2日目の中間発表に向けてテーマを出し合うなど絞っていく作業が行われました。



グループワークで活用されていた大判のチャート表

- 『STI政策におけるEBPMとデータ解析』

そんな中、初日からひときわ活発な意見が飛び交っていたのが『障がい者・高齢者の社会的包摶』のグループです。ボードに掲示したチャート表はみるみるメモでいっぱいになりました。

「障がい者雇用の受け皿を一次産業まで広げるはどうか」、「健常者と同じように複数の選択肢を示せる環境を作りたい」、「民間ではできること、例えば公的なお墨付きのある高齢者の転職市場を作れないか」などの意見が飛び交いました。また留学生のメンバーが日本とは全く違う母国の高齢者労働事情を紹介するなど、途切れることなくアイデアやエピソードが披露され、明るい笑い声とともにディスカッションが続いていました。

一方で、議論が停滞している様子のグループには、メンターとして参加した教員や各教室を巡回する行政官がアドバイスをし、軌道修正を行っていきます。



テーマを出し合い絞っていく作業が行われた

今回、行政官の立場からアドバイスを行った文部科学省の望月尊暁氏と松浦大樹氏は、「実際に政策を提言するにあたり行政と民間、二つの目線から意思決定のバランスをとるのは本当に難しいところです。各グループの多様なメンバーが、意見をすり合わせ意思決定できるようサポートしていきます」、「初日の今日は、事前準備の効果もあって堅実なスタートを切れたグループが多かった印象です。政策提言が机上の空論とならないために、どのようにまとめていくのかアドバイスできたらと思います。明日も楽しみです」と話してくれました。

行政官の意見に真剣な眼差しで聞き入っていたあるグループのメンバーは、「今日は事前に調べてきたことをもとに、どんな課題があるのか議論しようとしたが、進め方が難しく苦労していました。行政官の方に、解決策ありきではなくまず何が問題かを根本的に議論するようアドバイスをいただいて方向性が見えてきたので明日が勝負です！」と2日目に向け抱負を語ってくれました。

初日のグループワークを終え、ほっと一息の懇親会

初日から約4時間におよぶディスカッションを行った参加者たち。集合写真撮影を挟んで、午後6時からは場所を移し懇親会を行いました。

懇親会の冒頭でメンターの一人でもあるGRIPSの隅藏康一教授が「3日間よろしくお願ひします」と乾杯の音頭をとると、なごやかな雰囲気に。学生や教職員、行政官の垣根を越えて交流を楽しむ姿が見られました。

隅藏教授は初日のグループワークの印象について「オンラインで事前学習ができていたので、初対面とは思えない活気があります。10-20代の学生や官公庁、民間企業に籍を置く方など、さまざまなバックグラウンドを持つメンバーがチームとしてうまく融合しているのではないか」と。

普段、関西の大学でゲノム編集や医療における権力構造について研究しているという留学生は、初日を振り返って「サマーキャンプに参加するのが憧れでした。今日のグループディスカッションでは他の方の意見を聞くだけで勉強になり



乾杯の音頭をとったGRIPSの隅藏康一教授

初対面とは思えない活気。 多様なバックグラウンドを持つメンバーが融合した1日目

ましたし、私の母国のこと例もお話しすることができました。明日はたくさん出たテーマから抜粋する作業を行っていきます」と笑顔で初日の収穫をあげました。

また、街づくりに関わる企業に勤務しながらGRIPSで学ぶあるメンバーは、昨年に続き今回が2回目の参加とのこと。参加した理由について「科学技術が普及するプロセスを理解でき、また学んでいることをどう具現化するかを体験できるのが、このサマーキャンプの魅力です。普段の業務においても多方面の方々と高い次元でディスカッションするために、産官学の3つの思考を知ることが欠かせません。政策や科学技術イノベーションに携わりたい人にとって、このサマーキャンプはおすすめ度100パーセントです!」と語ってくれました。

さて他大学や他グループのメンバー同士が交流を深めた懇親会の後は、2日目の準備のために教室に戻るグループあり、煮詰まった議論を切り上げて英気を養うべく早めに解散するグループあり、また大学から場所を移して親睦を深める参加者の姿も。事前学習のおかげで比較的スムーズにグループワークが進んだことで、以前のように深夜近くまで議論に費やすことなく、思い思いの時間を過ごすことができたようです。



なごやかな雰囲気で交流を楽しんでいた



グループワーク後、行われた懇親会

政策提案プロセスを体験。

参加者たちが議論を深め合った3日間

中間交流会で新たな刺激やヒントを得ることができた2日目

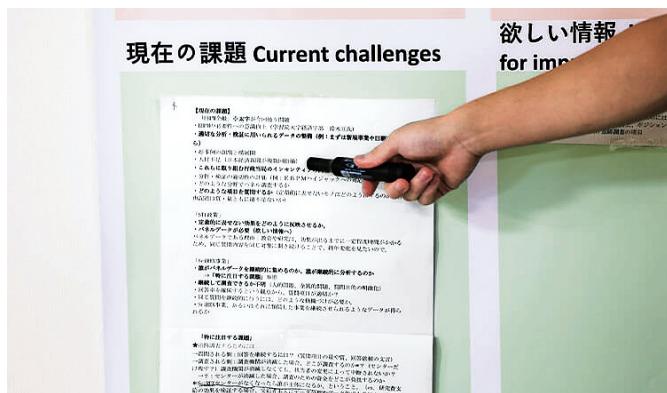


中間交流会に向け、朝から活発に議論

サマーキャンプ2日目は、朝9時にグループワークがスタート。午後から行われる中間交流会に向けて早めに集合したグループも多く、各教室は活気に溢っていました。

『生成AIとクリエイターの共存』をテーマとするグループでは、「個人情報保護」や「知的財産権」など盛り込むテーマを確認すると同時に、エビデンスとなる資料探しも進め始めている。すると、あるメンバーが昨日のディスカッションを受けて探してきた資料をすかさず共有します。その仕事ぶりに「素晴らしい！」と声があがっていました。

続いてチャート表に貼り付けた手書きのメモを、プリントアウトした資料に貼り替え、発表の流れを確認していきます。持ち時間5分間で説得力を持たせるために、どのあたりを強く打ち出すのか、話す順序をどうするか。全員で意見を出し合いながら、試行錯誤を繰り返していました。



中間発表に向け、メモをまとめた資料

また12グループ中、グループ分け時点から唯一社会人を含まない学生のみの構成で、地球規模の大きな課題に取り組んでいるのが『エネルギー政策の国際比較と次世代エネルギー』のグループ。昨日に続き、政策提言に盛り込むテーマの模索が続きます。メンバーからは「気候変動」「国際規格」「地域活性化」などキーワードが上がってくるものの、それらをどう絞り込み政策として道筋をつければいいのか、かなり苦心している様子です。

するとメンターの教員から「具体的な議論が進まない原因

は、地域の問題に落とし込めていないからでは？ 例えば地場産業に従事する人たちが脱炭素に取り組むメリットは何だろう？」というヒントが与えられました。このアドバイスにより、地域の一次産業、二次産業にアプローチするという骨格が見えてきたようです。



苦心しながらアプローチの方法を見つけていく

サマーキャンプの成功を支える実行委員たち

さて、中間交流会に向けますます活気づく教室間を行き来し、発表資料作成のサポート等を行っていたのが実行委員のメンバーです。数年前、サマーキャンプの卒業生たちからもっと交流を深めたいと自然発的に声があがり、また、サマーキャンプの企画・運営に携わる人を拡げていくべきとの運営側の考えもあり、実行委員を募るようになりました。今年は各大学から6名のOB・OGがボランティアスタッフとして参加。プログラム内容の検討やそれに伴う事前準備、会期中の会場設営や司会進行など多方面からサマーキャンプの開催を支えています。

今年のサマーキャンプでは、その実行委員たちが中心となって行った3つの取り組みがありました。

まず一つ目は、今回「アントレプレナーシップ」がテーマとなったことを踏まえ、例年実施している事前学習会で、この分野の専門家によるオンライン授業を行ったことです。今の時代に必要なアントレプレナーシップの考え方を参加者全員が共有できた成果は大きく、共通認識があることで実際のグループワークでも議論を進める原動力となったようです。

中間交流会で新たな刺激やヒントを得ることができた2日目



企画・運営を支えた実行委員

二つ目は、中間交流会での発表や最終発表の方法を、参加者全員が同じ会場で見られるように工夫したことです。とくに中間発表はメンバーを変えて前半後半の2回行うことで、発表を行わないメンバーが他グループの発表を見に動けるよう配慮しました。

また、互いの最終発表内容をより深く理解するため、中間発表の展示を最終日まで続けたことも新たな取り組みです。実際、空いた時間に展示を見に来る参加者も多かったようで、自分たちのテーマを進める上でヒントやよい刺激を得ることにつながりました。

そして三つ目が、「最終発表に賞を設けない」というものです。これまでのように賞を設けて順位づけをするのではなく、複数の観点から発表内容を審査し、今後の活動に役立つようフィードバックの比重を増やすことにしました。

これらの取り組みについて実行委員のリーダー役の一人、木村綾奈氏は「今年は新しい取り組みを成功させるため入念に準備を進めてきました。このサマーキャンプが参加するすべての方にとって有意義であるよう、最後まで頑張ります」と話してくれました。

ここまで成果を凝縮した中間交流会

昼休憩を挟んで、午後からはいよいよ中間交流会の時間です。各グループがここまで作業の成果を他グループのメンバーや教職員、省庁の政策担当者、民間シンクタンク職員の方に向けて発表し、質疑応答や意見交換を行います。持ち時間は

5分間。ポイントを記入した付箋や資料を貼り付けた紙ポスターを掲示し、メンバーを変えて同じ発表を2回行いました。



午前のグループワーク後、各グループで昼食

午前中のグループワークでメンターのアドバイスを受けて、停滞気味の議論が一気に加速した『エネルギー政策の国際比較と次世代エネルギー』のグループは、昼休憩の間もメンバーで会話を続け、中間発表に臨みました。そして2050年のエネルギーと産業、地域の課題を見据え、エネルギーの地産地消を行うべくマイクログリッドの導入を提案。自然災害が多発する中、大規模発電所の電力供給に頼らず地域の農林業からバイオマス資源を得て製造業、エネルギー産業へと循環させる一的な仕組みづくりについて提言しました。

また多くの見学者を集めていたのが、今回のサマーキャンプのテーマでもあるアントレプレナーシップ教育についての政策提言を行った『アントレプレナーシップとSTEAM教育』の日本語グループです。STEAM/アントレプレナーシップ教育に関わる人材を増やすことによって、全国の高校で持続的な教育体制を構築することを目的に政策を立案。外部人材の活用やインセンティブについて、さらには授業構成についても提案しました。

発表を受けた質疑応答では「高校生を対象にするのであれば私立、公立の区分をした方がよいのではないか。私立校ではすでに起業家の話を聞く授業が設けられているところもある」、「各都道府県の教育委員会も、ステークホルダーとして連携すべきではないか」といった意見が続々と寄せられまし

た。メンバーからは「自分たちにはなかった視点なので勉強になりました。最終発表に向けてぜひ取り入れていきたいです」との感想があがりました。



中間発表に耳を傾ける参加者たち

中間交流会を終えた参加者たちに話を聞くと「5分間の発表という短い時間ではありましたがあれ前で話すことで思考が整理され、さらに課題が見えてきました」、「質疑応答で厳しいご意見をいただくこともありましたが、それは同時にヒントにもなりました。皆さんからのすべての意見や質問がありがたかったです」などの感想を述べていました。そして中間交流会終了後も、時間の許す限り各グループの掲示を熱心に見て回る姿が目立ちました。

シンクタンクや省庁担当者との「相談会」

中間交流会の後は、1時間余りのグループワークを経て「相談会」が開催されました。これは文部科学省、科学技術振興機構、民間のシンクタンク等、科学技術イノベーション政策の立案に関係する組織がブースを設け、それぞれの業務内容の紹介や学生との懇談を行うというものです。

学生にとってはこれまでのグループワークや中間交流会の過程で生まれた疑問や、政策提言へのアドバイスを受けられる他、自分のキャリアや進路を考える際の参考にもなる貴重な機会です。皆、メモをとりながら熱心に話を聞いていました。

文部科学省のブースでは「たとえ高等教育に興味があつても、義務教育の担当に配属されることはあるか?」といった具体的な質問があがりました。これに対して文部科学

省の担当者からは「自分の現在の興味や関心も大切だが、幅広く取り組むことで得られる気づきが多く、長い目でキャリアを考える上で大切な経験となる」という実感のこもった回答がありました。



各組織がブースを設け、学生と懇談する相談会

また、あるブースでは中間交流会で使用した発表資料を手に政策の取りまとめについて相談するメンバーの姿も。最終発表での政策立案に向け幅広く知見を得たいメンバーと、明日の科学技術政策を担う参加者に応えようとするブース担当者が熱い意見を交わしていました。

相談会で民間シンクタンクのブースを回った学生の一人は「将来、政策立案に関わりたいという希望があり進路は省庁をイメージしていましたが、今回シンクタンクの業務内容を知り、民間で研究や政策立案の支援を行う仕事も大変やりがいがあると感じました。視野が広がったので参加してよかったです」と感想を話してくれました。

最終発表へ向け追い込む最後のグループワーク

朝9時から始まったグループワーク、中間交流会での発表、そして相談会と続いた長い1日の締めくくりは最後のグループワークです。教室に戻って午後4時40分から午後6時まで、3日目の最終発表に向け政策提言のまとめ作業を行います。中間発表で使用したポスターに質疑応答の内容を書き加えて方向性をより明確にしようとするグループや、プレゼンの仕方、話の流れについて表現面の見直しを図るグループなど、時間いっぱいそれぞれの課題と向き合います。

中間交流会で新たな刺激やヒントを得ることができた2日目

『生成AIとクリエイターの共存』をテーマに中間発表を行ったグループは、質疑応答で寄せられた「馬車から自動車へ、手作業から機械化へ。歴史を見ても技術革新は人類の生活を豊かにしてきた。それなのに、なぜAIは規制されるべきなのか。なぜ、否定的な議論をされることが多いのか?」「過去の芸術作品をオマージュして新たな作品を生み出すのと、模倣するとの違いは何か?」といった問題定義を踏まえ、技術発展に政策がどこまで介入すべきかを検討している様子。議論を見守った行政官アドバイザーからは「ステークホルダー間のバランスをとることがまさに政策。ただ今回の政策提言が一般論とならないよう、自分たちの考えをもっと打ち出すべきでは?」という意見が出されていました。



『生成AIとクリエイターの共存』の中間発表

高齢者と障がい者の労働市場の創設について中間交流会で発表を行った『障がい者・高齢者の社会的包摶』のグループは、質疑応答での反応を得て、高齢者をメインに政策提言をまとめ直すことを決定。高齢者雇用のニーズの掘り起こしや、ミスマッチを防ぐための施策、民間との棲み分けなどの課題についてさらに議論を進めていました。

さて、終了時間が近づくにつれ、集中してパソコンに向かい最終発表の資料作りを行うグループが増える中、ギリギリまで議論を続けていたのが『イノベーションエコシステム(社会実装・産学連携)を推進する人材育成1』のグループです。中間交流会で得た知見をもとに、なおテーマの枝葉が広がっているよう。提案する人材育成プログラムの細かな制度設計やステークホルダーである企業のメリット、政策提言

に盛り込みたい具体的な数字についてなど、ここにきて多くの意見が出される中、最後まで粘り強く調整を続けていました。

グループワークが終了。充実した表情で最終日へ

午後6時、初日から数えて計約10時間におよぶグループワークが終了しました。最終発表会の準備を終えたグループから帰路についていきます。

最終発表資料を作成しながらメンバーで会話を続け、最後の最後まで手直しに余念がないグループの姿もありました。出来あがった資料を前に発表の流れを何度も確認していました。



粘り強く議論を続けていたグループ

その一方で教室を後にするメンバーに話を聞くと、「事前学習会と対面での2日間の議論で、いろいろな意見を聞くことができ充実した時間でした。明日はとりまとめた政策提言を発表して、審査員の先生方からフィードバックをいただけるということで、緊張していますがとても楽しみです」と晴れやかな表情で語ってくれました。

政策提案プロセスを体験。

参加者たちが議論を深め合った3日間

つなぐ力、越境する力を發揮しやり切った最終日



静かな熱気に包まれた最終発表会

全国7大学から多様なバックグラウンドを持つ人材が集結した「SciREX サマーキャンプ2024」も、いよいよ最終発表会です。GRIPS内の大ホールに参加者、審査員、教職員など関係者が集まり、午前10時から各グループ15分間の政策提言と質疑応答が行われました。

今年は、実行委員会の提案によって例年のように賞を設けて順位付けをするのではなく、採点とフィードバックに比重を置くプログラムに変更。以下の3点が審査基準として参加者にも周知されていたことで、政策提言をまとめる上でのガイドラインとなったようです。



各グループの最終発表を聞く審査員の方々

審査の観点

- 1) 課題設定（現状把握・課題設置の適切さ、着眼点のユニークさ、新規性）
- 2) 政策提案としての完成度（エビデンスの扱い方、客觀性、議論のプロセス、具体性、実行可能性、費用対効果）
- 3) 表現力（理解のしやすさ、質疑に対する応答の的確さ、理論性）

審査員は平川秀幸教授（大阪大学）、飯塚倫子教授（GRIPS）、迫田健吉産学連携推進室長（文部科学省）、中川尚志海洋地球課長（同）。発表後の質疑応答や講評の場面において、各氏の持つ知見や実社会でのエピソードを交え丁寧にフィードバックを行ってくださいました。

「斜面市街地」をスマートシティ化する輸出構想

実行委員の吉村氏による開会の挨拶に続いて、早速最終発表がスタート。トップバッターは『課題解決に向けたスマートシティの社会実装』をテーマにディスカッションを行ってきたグループ。全員で登壇します。政策提言のタイトルは「国際的モデルとなる斜面市街地の整備 再現可能性のあるスマートシティの輸出」です。海外のスマートシティ事例の多くは平坦な都市であることから、日本に多い斜面市街地をスマートシティとして再整備し、斜面市街地の国際的モデルを構築。それを輸出するという政策提言です。

斜面市街地のメリットやデメリットを提示した上で、2030年までに実験的な導入都市の選定、座組を行い、具体的な導入サービス内容を検討。2035年までに法整備や予算整備、効果検証を終え2035年以降に本格的に導入段階に入るとまとめました。



発表の一コマ。話の流れや分かりやすさも評価のポイント

続く質疑応答では、審査員から「国際的な視野で横展開を狙った野心的な内容である」と評価を受ける一方、斜面都市のデメリットを解決し斜面都市の魅力を引き出す具体的なプロセスを細かく提示して民間を動かすことが資金の面でも重要なのではないか、またそれについてどのようなディスカッションがあったのか教えてほしい、という質問があがりました。

これに対しメンバーは「このプランを検討する際、政策でなければできることは何であるのかを考えたため、サービスの一つ一つの部分はあえて対象外とした。自治体と協働

つなぐ力、越境する力を発揮しやり切った最終日

した企業は新しく海外に進出するきっかけを作ることができる、という観点において投資と同じだと考えている」と応じていました。

ワークロンガー時代のジョブマッチングとは

人生100年時代、高齢者がより長く働くワークロンガー時代に則した政策提言も行われ、今日重要視されるテーマが会場の関心を引きました。タイトルは「ワークロンガー時代における持続的な高齢者雇用のための具体的方策～高齢者向けAI支援ジョブマッチングプラットフォーム構想～」です。

65歳以上の就業者数が20年連続で前年を上回り、就業意欲も高まる中、その能力を十分に発揮できる環境をどのように作り出すのか。また生産年齢人口が急減する日本社会において高齢者の就業促進は経済成長にもつながるのでは、と提言し、高齢者向けの転職支援をAIによるマッチングで行う構想を提案しました。中国が法定定年の年齢を段階的に上げていることや、同国の柔軟性のある高齢者雇用の事例も合わせて紹介するなど、多角的なエビデンスに基づいた政策提言を行いました。

これに対し質疑応答では、「高齢者はそもそもデジタルツールに入力して登録するのが難しい、という側面がある。AIによるマッチングと人的なアシストをうまく融合させるといのではないか」、「健康面の不安への対応はどうか」などの意見があがりました。メンバーは「データの入力についてはサポートを配置するなどの支援を検討するほか、健康や体力面に配慮して自動運転を導入した通勤支援も行っていきたい」と回答しました。

博士人材のキャリア形成と産学連携を考える

「博士人材イノベーション牽引プロジェクト」も、参加者の関心を集めたテーマの一つ。これは、博士後期課程の学生の産学連携マネジメントスキルを培い、イノベーションエコシステムを担う人材としてのキャリア形成を支援するというものです。産学連携における人材育成の現状と課題を関係者からヒアリングし、企業との人的交流などを通して博士人材を活用する政策提言にまとめました。

審査員からは「現状、産業界の人材クオリティは大変ネッ

クになっており、鋭い視点を持った提案だった。ただ難しいと感じたのは、社会人博士が大学側に移る時に、企業側からすれば投資して採用した人材が流出してしまうという側面があるので」との意見が出されました。これに対しメンバーは「社会人博士が大学に転籍するということではなく、出向するかたちを取り企業側のニーズをきちんとフィードバックする前提で考えている。将来的に産学連携がうまくいって、連携企業のブランド力向上につながると思う」と回答しました。審査員からは大学と企業、産学の人材交流によるそれぞれのメリットをどうやって見える化していくのか、今後も議論を続けてほしいとエールが送られました。



グループで昼食。発表を振り返り話題は尽きない

昼休憩を挟んで、午後2時過ぎには全12グループの政策提言と質疑応答が終了しました。午前中に発表を終えたグループも集中を切らすことなく発表や審査員のコメントに聞き入っており、会場は終始静かな熱気に包まれていました。

審査員より、全てのグループに5分間のフィードバック

続いて、今年初の試みとして全グループへ各5分間ずつのフィードバックを行いました。グループごとに再び登壇し、審査員の方々からの講評を聞きます。審査員からは政策の具体的な改善点や問題提起、今後さらに議論を進めてほしいポイントなど細部に渡る意見が寄せられました。

「この構想が世界的に見て今後どのくらいのポテンシャルを持つのか。それがわかるエビデンスを補うことができれば、実際の政策として提言できる可能性が高まるかもしれない

い」「予算面について、公的資金以外に民間資金を活用していく方法もあるのではないか」、「このプロジェクトが本当に持続可能なのか。それをどういう形で担保できるのか、もつと細部をプラスアップしてほしい」、「今回の提言では規制やルールに着目していたが、ステークホルダーの利益をどう守るか以外にも、マーケット全体が成長していくようなビジネスの新しい展開は考えられないか」など、グループ内でのディスカッションでは発見できなかったさまざまな着眼点のフィードバックを受けることができ、大きくうなづきながらメモを取るメンバーたちの姿が印象的でした。

また、完成度の高い政策提言をまとめたグループには、審査員から「この3日間で取り組んだ課題や取りまとめた政策提言に対し、今後どう向き合っていくのか教えてほしい。また将来の進路の希望は民間企業なのか省庁なのか、どう考えていますか?」という直球質問も投げかけられました。このサマーキャンプが、確実に日本の科学技術イノベーション政策に関わる人材育成の場となっている、そんな期待の高さがうかがえる場面でした。



グループごとに登壇。審査員からフィードバックを受ける

全体講評「ロジカルな思考が分かりやすい政策提言につながった」

3日間に亘る『SciREX サマーキャンプ2024』の締めくくりとして、審査員の平川教授より講評がありました。今年の印象として「ロジカルで分かりやすい提言が多かった」と評価します。

「どのグループも明確な政策課題を設定し、それに対してアプローチを行うというロジックの構造がはっきりしており、プレゼンテーションを受け止める側も非常にわかりやすかったです。これは、おそらく準備段階からメンターの先生方や参加者の皆さんのが意識してきたことの表れだと思います。そしてこのことは、皆さんがそれぞれの専門分野に戻り、将来仕事をする上でも役立つ糧となるのではないかと思いました」

また、今後科学技術イノベーション分野で活躍する人材について平川教授は、「つながる、つなぐ、つなぎ直す」ことが大切だと続けます。「このサマーキャンプは、いろいろなところから人が集まってきて交わる貴重な機会です。昨日、各拠点の先生方や職員の皆さん、研究機関の皆さんのが集まって教職員セッションを行ったのですが、第7期科学技術イノベーション基本計画をどうするかという議論がメインとなりました。その中で特に大きな話題としてあがったのが、離れている人間や物をどうやってつないで新しいことを生み出せるようにするのか、あるいは改めてつなぎ直すのかということでした。今あるさまざまな境界線を越えて新しいつながりを見出す力を持った人たちに、今後どんどん活躍してほしいと思います。そういう意味でこのサマーキャンプは、皆さん自身の中のつながる力、つなぐ力、越境する力、センス、それを發揮してかたちにする良い機会だったのではないかと思います」

3日間の疲れも見せず、やり切ったという晴れやかな表情で聞き入る参加者たち。閉会した後も連絡先を交換したり、名残惜しそうに懇談を続けたり、笑顔で再会を誓う様子があちらこちらで見られました。



全体総括を行う平川秀幸教授

つなぐ力、越境する力を發揮しやり切った最終日

この夏の出会いを糧に、大学や職場、それぞれの場所へ

参加者の一人に感想を聞くと「今、教育学部の3年です。普段学んでいるテーマとは全く違う分野に参加したのですが皆さんのレベルがとても高く、正直なところついていくのがやっとでした。でも、参加して本当に良かったと思います。普段お会いできない学外の方や社会人の方のお話を聞くことができて、自分の将来のイメージがなんなく湧いてきました」と前向きに述べました。

また、省庁勤務歴二十数年で修士課程1年の参加者は「きっかけは大学院の単位が取れることが魅力で参加したのですが、期待を超えた充実感が残りました。自分の半分くらいの年齢のグループメンバーや、普段会えないような方たちと出会えたことが良い経験になりました。グループワークでは若い人たちが自由に発想できる環境を作りたいと思い、自分は司会進行のような役割を買ってきましたが、逆に刺激をもらいました」と振り返りました。

ここで得た経験や学びをそれぞれの大学や職場に持ち帰り、研究活動、仕事の中で生かしていくことで、科学技術イノベーション政策のコミュニティが広がっていく——。そんな期待感と共にSciREX サマーキャンプ 2024 が幕を下ろしました。



閉会後の交流を経て笑顔で再会を誓う